

それぞれの居合わせ方 藤島秀憲

どうして あの前絶後の災難に

口をあけ

空言を吐けようか

どうして あの目の前のまっ暗な破局に

口をつぐみ

顔をそむけられようか

なすすべもなく たただだ画面を見つめる

「世界」五月号に掲載された高銀^{コウギン}の詩「日本への礼儀」の冒頭七行である（訳＝高柳優子）。東日本大震災以来、同じような思いを持つ人は多いだろう。どう表現するのか、あるいは表現しないのか、すべての歌人に突きつけられた課題である。今回の震災を、原発事故を、竹山広が生きていたら、どう詠むだろうか。

・居合はせし居合はせざりしことつひに天運にして居合はせし人
よ 竹山 広『千日千夜』

平成七年の阪神淡路大震災の折に詠まれた歌である。「居合はせし人」とは死者も含め被災した人を指しているのであるが、今回の震災で感じたことは、実にさまざまな居合わせ方があったということである。死者、行方不明者、被災して避難を続けていた人。野菜を出荷できない農家、漁に出られない漁師。余震におびえる子供。徘徊をはじめた老人。福島第一原子力発電所で事態

の収束に当たっている作業員。帰宅難民と呼ばれた人など。多くの人が居合わせた人になった。

「短歌研究」五月号の特集「現代の96人」では二十六人が震災をうたった。九十六人中二十六人というと少なく感じるが原稿の提出時期が三月十一日を挟むからだろう。

・居あわせてともに驚く日本人オランダ人フランス人約二百名

佐佐木幸綱

・空っぽのパンの棚弁当の棚

根こそぎ持ち去った力を思う
加藤 治郎

・停電の夜を息詰めて耐へてゐる幾百万の一人なるわれ

小池 光

佐佐木の歌は他の歌からレンブラント展の会場で地震に会った場面とわかる。まさに揺れている瞬間を客観的にうたうことによつて臨場感が生まれた。加藤の歌は、その日のコンビニの様子。買溜めに走った人々の心理を津波に喩え表現した。加藤は買えなかつたひとり、遅れてきた客だ。小池の歌は計画停電。「耐へてゐる」にこめられた怒りを読みたい。居合わせた人として三人がそれぞれの居合わせ方をうたっている。

阪神淡路大震災の時もそうだったが、居合わせてしまったためにその後長期間にわたり居合わすことになる人がいる。昭和二十年八月九日、原爆投下に居合わせた竹山広は死ぬまでの六十五年間居合わせ続けたわけだが、文学上は十年間口をつぐみ、そして、うたった。口をつぐむという選択肢も、確かにある。だが、顔をそむけなかつたから竹山は長い沈黙を経て短歌に結実できたのだと、いま改めて思う。